

タイトル	定型表現から考える小中高英語教育の連携 - 定型性と可変性の視点から -
著者	田中, 洋也; TANAKA, Hiroya
引用	北海学園大学人文論集(76): 85-111
発行日	2024-03-31

# 定型表現から考える小中高英語教育の連携

## — 定型性と可変性の視点から —

田 中 洋 也

### はじめに

本稿は、2023年11月24日に開催された、第65回北海道小学校・中学校・高等学校英語教育研究大会（於：札幌ライフォートホテル）の講演資料を加筆、修正した研究ノートである。また、本稿における先行研究に関する記述は、田中（2022）を基にしている。本研究では、小学校、中学校、高等学校で英語指導に携わる教育者を主な読者として想定し、それぞれの段階で用いられる英語教科書における定型表現の使用実態に焦点を当て、教科書会社1社の教科書を例に小規模の英語教科書コーパスを構築、定型表現の使用状況を調査した。また、教科書コーパスにおける定型表現について、アメリカのTVドラマコーパスおよび、同コーパスから抽出した英語口語基礎定型表現リスト（田中、2022）との比較を行った。その結果、英語教科書における定型表現は、学校の段階が進むにつれて複雑化し、可変したものに移行するものの、対面コミュニケーションの基礎となる話し言葉的な語彙、句動詞、縮約形などの口語性には課題があり、学習者が基礎的定型表現知識を習得するには、教室における教師のインプット及び教師と生徒、生徒間のインタラクションの果たす役割が重要であることを示した。また、学術場面で用いられる定型表現についても、教科書では十分な頻度で示されていないため、その指導、学習には指導者の注意が必要となることを確認した。

## 1. 言語知識・技能における定型表現

外国語教育における言語の知識・技能を検討する際、「語彙」「文法」「聴くこと」「話すこと(発表・やりとり)」「読むこと」「書くこと」など様々な観点があるが、本稿では、これまであまり注目されてこなかった、「定型表現」を視点として小学校、中学校、高等学校の英語教育連携の可能性について検討する。英語で文字表記をする際に空白(スペース)で区切られる単語(word)が最小の単位として存在する。この空白を超えた、複数の語が「かたまり」(chunk)となったものが「定型言語」(formulaic language)である。定型言語には、「コロケーション」(collocation)、「慣用表現」(conventional expression)、「句動詞」(phrasal verb)、「語彙連結」(lexical bundle)などいくつかの概念や呼称があるが、本稿では、「定型表現」(formulaic sequences)として扱う。Wray (2002)によると、定型表現とは「連続的であれ非連続的であれ、あらかじめ組み立てられている、または組み立てられているように思われる、語や他の意味を持つ要素によるつながりであり、文法によって生成、分析されるものというよりも、ひとつのまとまりとして記憶に貯蔵され、言語使用の際に想起されるもの」と定義される(p. 8)。Thank you. / Me, too. / Could you ... / I'd appreciate it if you could ... なども定型表現の例である。これらの表現は、繰り返し、頻繁に用いられるため、Wrayが指摘するように、あらかじめ組み立てられている(prefabricated)ように認識、使用される。工場で完成された部品を現場で組み立てて一つの建物として完成させるプレハブのように、記憶の中にある定型表現知識は、積み木のような部品(building blocks)として使用時に組み立てられ、文として完成させる働きをするものとして捉えることができる。

Wray (2017)では、定型表現の観察可能な特徴として、(1) 頻出で親密度が高い(例, have a nice day), (2) 意味的に不透明であり、(または)形式的に不規則である(例, bullet point), (3) 産出や理解が容易である(例, happy birthday), (4) 1語より長いまとまりである(例, Before I answer

that can I just ...), (5) 意味的または語用論的な付与がある（例, break a leg), (6) 話者の集団的アイデンティティを伝える（例, And I'm so, like ...), (7) 形として定着している（例, the text of the Quran, see Saleem, 2015）などを挙げている（p. 572）。定型表現は、これらの特徴をすべて満たさなければならないものではなく、いくつかの特徴を持ち合わせたものとして解釈される。定型言語に含まれる、その他の用語も上記7つの特徴のいくつかを満たしている。例えば、イディオム（例, over the moon「大喜びして」, spill the beans「(うっかり) 秘密を漏らす」）は、慣用的に用いられ意味的に不透明であるため、少なくとも上記の(2), (4), (5)を満たしていることになる。

## 2. 定型表現の偏在性と有用性

定型表現は話し言葉においても、書き言葉においても非常に多くの割合を占めていることが知られている。Erman and Warran (2000) では、定型表現は話し言葉の 58.6%, また、書き言葉の 52.6% を構成していることを報告している。また、Foster (2001) では、英語母語話者による自然発話の 32.3% が定型表現であったと報告している。英語学習における定型表現知識の重要性を示し、学習方法を案内する書籍には、「英語は決まり文句が 8 割—今日から役立つ『定型表現』学習法—」（中田, 2022）があり、定型表現の割合を 8 割と示している。言語使用に占める割合の高い定型表現には、多くの有用性があるとされ、Schmitt and Schmitt (2020) は、次のようにまとめている。

- (1) 考えや意味を表現する（例, Too many cooks spoil the soup. により一般的な信念や助言を表す）。
- (2) 言語機能を実現する（例, I'm really sorry about X. で謝罪を行う, I'm sorry to bother you, but X ... でボライトネスを表現する）。
- (3) 会話を維持する（例, How are you? See you later. などで会話のや

り通りの段階を知らせる)。

- (4) 社会的相互作用を促進する社会的表現を提供する(例, Nice weather today. などの意味のある情報ではなく, 会話を円滑に進めるために相手への関心を示す)。
- (5) 談話構成を標示する(例, 口語では, on the other hand, as I was saying など)。
- (6) 専門的定型表現を提供する(例, 管制官の「着陸許可」を明示するための固定表現としての, Cleared to land.)。
- (7) 言語使用を展開するための構成要素 (building blocks) を提供する(例, That's an interesting point. は相手の意見への同意としても対照的意見を述べる前の合図としても用いられる)。
- (8) 語用論的価値を表現する(例, I don't know if X は命題について不確かであることを表す)。
- (9) 流暢性を促進する(例, より速く読む, より流暢に話すなどの流暢性)。
- (10) 意味を形成, 定義, 増大する(例, border は単独では「あるものの縁や端」を意味するが, border on (句動詞) では, His passion for self-improvement bordered on the pathological.のように, その使用の75%が否定的な比喩表現として用いられる)。

Schmitt & Schmitt (2020, pp. 86-88) を参考に著者作成

第二言語学習者は, 定型表現を使用することで, 言語使用の流暢性が高まる(すらすら話せる, 書ける), 多くの言語機能(例, 依頼, 謝罪, 感謝, 同意, 提案など)が実現できる, 会話を維持することができる, 他者によりその言語使用を高く評価されることが指摘されている(例, Hsu & Chiu, 2008; Keshavarz & Salimi, 2007)。このうち, 「流暢性が高まる」に関しては, 学習者は発話する際に, 定型表現知識で文の骨格を賄うことができるため, その認知資源を他に使用する語彙などに割り当てることができる利点も考えられる。例えば, 相手にものを頼む時に, I was wondering if you

could...が産出知識となっていれば, help me out, do me a favor, give me some advice のような could に続く, 依頼内容の表現を考えられることになる。依頼内容の表現も, この例のように定型性を持っている場合もある。また, 「言語機能」「会話の維持」に関しては, I see your point, but...を用いて, 相手の意見への理解を示しながらも, 不同意の意思を表し, but を素早く発話することで聞き手に自分の意見を聞かせることができる。以上の英語定型表現の偏在性, 有用性を考慮すると, 英語の授業で, どのような定型表現のインプットが提示可能かを明らかにすることは, 教育実践者にとって, 意義があると考えられる。次節では, 教科書の定型表現を分析することから英語授業における定型表現の実態と役割を検討することとする。

### 3. 教科書の定型表現

本研究では, 小学校, 中学校, 高等学校の各教科書で学習者にどのような定型表現がインプットとして提示されているのかについて調査をすることにした。本来は, 全ての検定教科書を対象とした網羅的な調査が望ましいが, 調査期間, 利用可能なデータの制限から, 本研究の調査では, 東京書籍株式会社の承諾を得て, 1社の教科書を対象とすることとした。また, 調査時に使用可能であったデータの関係で, 高等学校は必修科目である, 英語コミュニケーション I の3種類の教科書を使用することとした。調査に当たり, 複数語句 (n-gram) の抽出, 統計処理には, コーパス・コンコーダンス・ソフトウェアの CasualConc 3.4.0 (Imao, 2023) を用いた。分析の対象とする定型表現は, 頻度3以上とした。また, n-gram の範囲は小学校教科書ではデータ量が少ないため, 2-5語, 中学校, 高等学校では2-4語とした。さらに, ソフトウェアによる結果出力データは, 重複, 文字化け, 汎用性が低いと考えられる項目 (例, beef is in the red..., eat beef curry) の削除を行い, 整理した。コーパスデータは, OCR 処理を行なった pdf ファイルを用いていること, 英文の空所補充問題などの不完全な

データも対象としていることから、数値は正確性を欠く可能性がある。そのため、本研究における英語教科書内の定型表現使用については、おおよその結果を示す予備的調査として、その解釈に注意が必要である。本資料に含まれない教科書定型表現データは、オンラインで公開している<sup>1</sup>。

### 3.1 小学校英語教科書における定型表現

小学校教科書の定型表現調査には、New Horizon Elementary English Course 5-6（東京書籍）及び Picture Dictionary New Horizon Elementary English Course（東京書籍）を使用した。2-5語を抽出、整理、頻度順で並べた結果の上位50項目を表1に示す。

頻度順では、2-3語のように語数が少なく、意味が完結しない定型表現が上位に位置する限界点にも注意しながら結果を見ていくこととする。実際に教科書を使用している指導者が見れば、容易に理解ができると考えられるが、上位の項目のいくつかは、教科書本文ではなく、セクションのタイトル（Let's Listen, Let's Try, Let's Read など）である。短く、意味が完結していない例で *this is* の機能に注目すると、人やものを紹介する（*This is Mark Smith.* / *This is my favorite place.*）、贈り物をする（*This is for you. Here you are.*）、カードのタイトル（*This is my hero.*）などが確認できた。一方で、本来は言語機能も多く、有用性の高い項目（例、*are you*）が、あまり活用されていない事例（例、*Are you Emily?* / *Are you good at ...?* / *How are you?* の3例）もあった。実際の教室指導では、*Are you all right?* *Are you tired?* *Are you sure?* など教室内のインタラクションにも有用性のある表現として活用できるため、指導者が教科書の言語使用を補うことが検討できる。その他にも、指導者による定型表現使用が重要な役割を果たしそうな例が確認できた。*What would you like?* は5年生で注文を取る際の「ていねいな表現」として導入されている。しかし、6年生

---

<sup>1</sup> 本稿の調査で使用した定型表現データは次で公開している。  
<https://bit.ly/202311124>

表 1. 小学校英語教科書 New Horizon Elementary English Course, Picture Dictionary 定型表現上位 50 項目

Rank	N-grams	Freq.	Rank	N-grams	Freq.
1	do you	70	26	my birthday is	8
2	this is	36	26	she is	8
3	what do	33	26	sports day	8
4	let's listen	32	26	thank you for	8
5	let's try	31	26	what is	8
6	let's read	29	31	did you	7
7	want to	28	31	my best memory	7
8	what do you	27	31	new year's day	7
9	i want to	25	31	thank you for listening	7
10	do you want	24	31	where do	7
11	do you like	20	36	can you	7
12	this is my	19	36	how do you	7
13	do you want to	18	36	how much is it	7
14	what do you want	17	36	in Japan	7
15	where is	16	40	let's watch and think	6
16	thank you	15	40	my house	6
16	who is	15	40	are you	6
18	what do you want to	13	40	do you want to be	6
19	he is	11	40	he can	6
19	when is	11	40	i want to study	6
21	i want to be	10	40	i'd like	6
21	my birthday	10	40	live in	6
23	school trip	10	48	the post office	5
24	let's read and write	9	48	we are	5
24	when is your	9	48	what would you like	5

では would you like, would like が登場しない。また, I'd like で注文する表現は登場するが, I'd like to, I would like to の表現は登場しない。一方, 似た意味を持つ I want to は Picture Dictionary を含めると 29 回登場する。田中 (2022) では, 日常のコミュニケーション場面を代表しているアメリカ TV ドラマ脚本から約 525 万語のコーパス (American Sitcom Corpus) を構築, 基礎口語定型表現を抽出した。そのコーパスでは, I want to, I wanna が合わせて 2,119 回出現し, I'd like to, I would like to は合わせて 660 回出現している。確かに I want to が, より多く使用され, 頻度に 3 倍

程度の違いがあるが、聞き手に伝える微妙な意味合いの違いもあり、実際の言語使用ではその区別も重要となる。would you like to ...? I'd like to ... も言語使用における頻度や有用性を考えれば、指導者による教室内のインタラクションが大きな役割を果たすと考えられる。

頻度は低いながらも有用性の面から検討したい例が、もう一つある。6年生 Unit 4 で I enjoyed camping. I ate curry and rice. *It was great.* (p. 37) が導入されている。It was + 形容詞は、他にも、Unit 4 で I went to Lake Biwa. *It was large.* が、Unit 7 では、I enjoyed playing tag. *It was fun.* が出現する。It was + 形容詞は、単純な構造であるが、経験についての感想を伝えるのに有用性の高い表現である。教室での指導場面では、ここに既習語（例、OK, fine 「(すごく良くはないけど) 大丈夫」）やカタカナ語として用いられている語（例、cool 「かっこいい」）など学習者にとって身近な語を入れることで、学習者が伝えられる表現の幅を広げることが考えられる。

小学校教科書では、書く練習を含めて、学習目標となる同じ定型表現が教科書内で繰り返し、提示されている。その重要表現の定着を図りつつ、動詞、前置詞の目的語（例、I like + 目的語, thank you for + 目的語）や疑問文の動詞（例、How do you + 動詞原形, can you + 動詞原形）を柔軟に入れ替えたインプットの役割が期待できる。例であげた、thank you for は汎用性の高い表現であるが、教科書で確認できた表現は、*Thank you for listening.* のみである。*Thank you for helping me.* *Thank you for saying that.* *Thank you for telling me.* など既習、未習語を用いた様々な教室内のインタラクションを通し、指導者のインプットを調整することで、学習者の産出知識となる前提の受容知識としての定型表現知識の定着、言語への気づきを促すことが期待できる。小学校教科書では特に、here and now 「今ここで」と you and I 「あなたと私」のコミュニケーション場面が多く展開されている。その現場性及び即時性の特徴を活かした、教師による定型表現のインプットは学習者の定型表現知識の習得に貢献しうると考える。

### 3.2 中学校教科書における定型表現

中学校の教科書分析には、New Horizon English Course I-III（東京書籍）を用いた。2-4語を抽出、整理、頻度順で並べた結果のn-gram 毎の上位30項目を表2に示す。n-gram 毎に提示した理由は、頻度順のみに頼った場合に、2語で意味が完結しないものが上位に位置することで全体像の理解が難しくなることを避けるためである。ここに掲載できないデータは、

表 2. 中学校英語教科書（New Horizon English Course I-III）2-4 gram 上位 30 項目

No.	4-gram	Freq.	3-gram	Freq.	2-gram	Freq.
1	<i>do you want to</i>	33	<i>i want to</i>	67	<i>do you</i>	197
2	<i>what do you want</i>	14	<i>do you want</i>	41	<i>it is</i>	90
3	country to live in	11	<i>what do you</i>	38	<i>you have</i>	64
4	a lot of people	10	<i>do you like</i>	36	<i>are you</i>	56
5	it is important to	10	do you have	32	<i>in japan</i>	56
6	no i am not	10	a lot of	25	you like	53
7	what are you doing	9	do you know	19	<i>this is</i>	51
8	what do you have	9	in the world	18	<i>go to</i>	48
9	if you have time	8	i do not	17	<i>you can</i>	47
10	may i ask you	7	i could go	15	<i>you want</i>	47
11	show you how to	7	yes i am	15	<i>what do</i>	42
12	what time do you	7	around the world	14	<i>thank you</i>	39
13	where do you want	7	i went to	14	heritage site	38
14	<i>why do you like</i>	7	is a good	14	<i>to be</i>	38
15	you come to school	7	on the internet	14	to do	38
16	are you going to	6	the united states	14	i think	36
17	have various things to	6	<i>where do you</i>	14	<i>it was</i>	36
18	how do you come	6	go to school	13	<i>to school</i>	32
19	i can show you	6	i don't know	13	<i>we can</i>	31
20	is the oldest of	6	how about you	12	every day	30
21	take off your shoes	6	i'm going to	12	<i>good at</i>	29
22	what time is it	6	if you have	12	point of	29
23	can you help me	5	it is important	12	there are	29
24	help people in need	5	yes i do	12	have to	28
25	i want to eat	5	a good country	11	if you	27
26	i want to see	5	curry and rice	11	very much	26
27	i will show you	5	how are you	11	<i>did you</i>	25
28	<i>nice to meet you</i>	5	how to use	11	how to	25
29	what did you do	5	this is a	11	look at	25
30	what can we do	5	what are you	11	<i>what is</i>	25

オンラインで公開している(脚注1)。結果には複数語句による複合名詞句(例, *curry and rice*, *heritage site*)を含み, 本来的な定型表現と考えられない項目も含むが, 教科書の実態を反映させるため, そのまま含めることとした。また, 小学校のリストと重複する項目は斜体で示した。

中学校教科書と小学校教科書の結果を比較すると, 多くの重複が確認できる(例, *do you want to*, *I want to*, *do you like*)。それと同時に, インプット量の増加, 言語形式の複雑化にともなって表現は少しずつ多様化している様子も見てとれる。下記に教科書の構成, 教材の性質にも関係する特徴をいくつか確認することとする。まず, 4語の項目では, 教科書の教材, 特にキーセンテンスに由来する定型表現が含まれている。*country to live in* は *I think [don't think] that Japan is a good country to live in because ...* の意見表明の表現の繰り返しにより上位に位置した表現である。*take off your shoes* は, 命令文ではなく, 助動詞 *must* で, *You must take off your shoes when you enter a house.* の表現による。*take off* は, この用例の「脱ぐ, 取り外す」以外にも「離陸する」「(突然) 出発する, 始まる」「休暇などを取る」など多くの語義を持つ句動詞であるが, この後, 検討する高校教科書では, 「始まる」の1例のみであった。この他, 句動詞では, *look at* (25回), *get up* (15回), *got out* (10回) など, ある程度の頻度で繰り返されるものはあるが, 教科書のみでは句動詞のインプットが確保されているとは言い難い状況である。その他, *may I ask you* は *May I ask you a favor?* が出現例のみであった。これら, キーセンテンスは, 教科書構成では, 教科書 Unit の本文, 同じページの Today's Point のセクションで繰り返し用いられている。また, 目次, 巻末の「表現のまとめ」など, 比較的, 目立ちにくい場所にも配置されている。そのため, 繰り返しの接触, 言語材料のリサイクルによる学習者の知識の定着には, 授業者の指導, インプットの提示方法が影響を与えるものと考えられる。上記の *May I ...* の表現は, 現代英語では, そもそも, 似た意味を持つ *Can I ...* に比べると頻度も低い表現であるが, それでも *May I ask the reason?* *May I ask why?* *May I ask a question?* などのように教室内のインタラクションでの活用が

検討できる表現が数多くある。知識の定着には、該当の Unit にとどまらず、長い期間を通じて、同じ重要表現を再活用したインプットの提供が学習者の知識習得に貢献する可能性を示している。

2-3語の定型表現に目を移すと、how are you, how about you, I don't know, thank you など単独でも用いることができる表現がわずかに確認できるが、意味のまとまりが完結しないものが増えてくる。完結していない、すなわち、完全性 (integrity) を持たない定型表現は指導も難しく、また、それ単独で指導することは有効ではない可能性もあるため、ここでは、do you have を例として検討することとする。do you have は小学校でも登場する表現であるが、その出現例は、What *do you have* on Mondays? *Do you have* brothers or sisters? (6年生), What time *do you have* lunch? (Picture Dictionary) などであった。また、中学校教科書では、*Do you have* any cousins? (1年生), How many rackets *do you have*? (1年生), What *do you have* for breakfast? (1年生) のように、小学校同様、一般疑問文 (Yes/No 疑問文), how many, what, what time など疑問詞を用いた疑問文の例が確認できる。一方、前述した American Sitcom Corpus で確認すると、特徴的な例では、*Do you have* a second (minute)? *Do you have* any questions? *Do you have* any ideas (+how, what 間接疑問), *Do you have* anything to say? などの一般疑問文が確認できる。また、疑問詞では why, what の順で多く用いられるが、その用例は、Why *do you have* to go? What *do you have* to say for yourself? のように、一般動詞 have ではなく、have to の疑問文もある。中学校教科書では、What *do you have* to do this week? (2年生) の例が1例のみ確認できた。また、次に検討する高校英語コミュニケーション I 教科書3種類では、do you have to の例は、出現しない。確認できたのは、*Do you have* any advice for us? (Enrich Learning I), *Do you have* any plans for tomorrow? (All Aboard I), *Do you have* a message for high school students? (Power On I) のように、主として一般疑問文である。この例のように、定型性はあるものの、意味のまとまりが完全ではなく、用法もひとつにまとまらない定型表現が、どのように習得、

使用されていくのかは明らかではない。しかし、上記の *do you have to*, *do you have any ...* のような表現の有用性を考えれば、教科書以外のインプットとして、継続して提示することに、一定の有用性があると考えられる。後節では、別の例で再度、検討する。

今回の分類では、定型表現の範囲外として扱っているが、前置詞+冠詞(例, *in the* 119例, *on the* 88例, *of the* 64例)にも、その定型性が認められる。*in the* を例に取って、小学校から高校までの教科書で後ろに来る名詞を集計すると、多い順に、*future*(31), *world*(25), *morning*(12), *ocean*(11), *sea*(9), *city*(7), *countryside*(7)である。日常会話を代表する *American Sitcom Corpus* では、*middle*(444), *world*(410), *morning*(288), *car*(267), *back*(218), *bathroom*(192), *kitchen*(175)である。重なり(*world*, *morning*)があるものの、教科書では、日常生活の表現(*car*, *bathroom*, *kitchen*)が不足していることがうかがえる。このように、教科書で提示されるインプットの多様性に課題がある状況において、学習者の定型表現知識を定着させるには、やはり、指導者や補助資料によるインプットの役割が果たす役割が大きいものと考えられる。特に、上記の例のように定型性はあっても、その可変性の大きさから、注意しないと見逃されてしまう表現は音声面において、弱化、同化、脱落などの変化にも注意が必要である。明瞭な発音、大きな抑揚、ゆっくりしたスピードによるティーチャートークでの導入から、しだいに速度や音の変化をともなった理解の過程への調整ができることも指導が果たす大きな役割、利点として期待できる。

### 3.3 高等学校教科書における定型表現

高等学校の教科書分析には、英語コミュニケーションIの教科書3種類、*All Aboard I*, *Enrich Learning I*, *Power On I* (東京書籍)を用いた。頻度3以上の2-4語を抽出、整理、頻度順で並べた結果のn-gram毎の上位30項目を表3に示す。中学校教科書分析時と同様に2語の表現が上位に来ることで全体像の把握が難しくなることを避けるために、n-gram毎に示し

表 3. 高等学校英語コミュニケーション I 教科書 (All Aboard I, Enrich Learning I, Power On I) 定型表現 2-4 gram 上位各 30 項目

No.	4-gram	Freq.	3-gram	Freq.	2-gram	Freq.
1	<i>do you want to</i>	19	<i>i want to</i>	55	<i>do you</i>	176
2	for the first time	13	<i>around the world</i>	42	<i>going to</i>	62
3	would you like to	13	<i>do you think</i>	37	<i>want to</i>	59
4	<i>what do you think</i>	12	<i>what do you</i>	35	<i>go to</i>	55
5	<i>i want to go</i>	12	<i>a lot of</i>	30	<i>it is</i>	54
6	people around the world	11	<i>do you know</i>	28	<i>like to</i>	50
7	<i>do you have any</i>	10	<i>in the future</i>	24	<i>look at</i>	49
8	why or why not	9	<i>do you like</i>	20	<i>you are</i>	49
9	what is your favorite	8	<i>one of the</i>	20	<i>what do</i>	48
10	why do you think	8	<i>fish and chips</i>	20	<i>you know</i>	48
11	<i>all over the world</i>	7	<i>what kind of</i>	19	<i>it was</i>	47
12	do you know about	7	<i>do you have</i>	18	<i>the first</i>	46
13	at the beginning of	7	<i>i'd like to</i>	16	<i>they are</i>	44
14	for a long time	7	<i>have you ever</i>	15	<i>you can</i>	44
15	want to go to	6	<i>would you like</i>	14	<i>what is</i>	39
16	for as long as	5	<i>thank you for</i>	13	<i>you like</i>	37
17	<i>what did you do</i>	5	<i>what can we</i>	13	<i>talk about</i>	35
18	are you interested in	5	<i>why do you</i>	13	<i>there are</i>	34
19	as long as possible	5	the end of	13	<i>we can</i>	34
20	do you think of	5	when i was	13	<i>you will</i>	33
21	thank you for listening	4	be able to	12	<i>have you</i>	32
22	<i>what can we do</i>	4	the number of	12	<i>interested in</i>	32
23	at the end of	4	<i>high school students</i>	11	<i>before you</i>	31
24	<i>could you tell me</i>	4	<i>i don't know</i>	11	<i>are you</i>	30
25	do you know any	4	is famous for	11	<i>he was</i>	30
26	i would like to	4	in the ocean	11	<i>she was</i>	30
27	look at this picture	4	what is your	10	<i>we have</i>	30
28	we would like to	4	<i>how do you</i>	10	<i>have to</i>	29
29	<i>why do you like</i>	4	i like to	10	<i>one of</i>	29
30	you should go to	4	in the morning	10	<i>the same</i>	29

た。同様に、表 3 に掲載できないデータはオンライン公開している（脚注 1）。今回の結果は、表現に焦点を当て、英語の発信能力の強化を目的とした「論理・表現」の教科書及び 2 年生以降の教科書を用いていない限界点があるため、高校 1 年次の必修科目の教科書における定型表現例として、その解釈には注意が必要である。表 3 では、中学校のデータと重複する項

目(頻度3以上)は斜体で示した。

結果を見ると、4語の項目については、小学校、中学校、高校と段階的に多様化、複雑化している様子が見てとれる。一方、2-3語の定型表現については、その多くが小学校、中学校と重複していることがうかがえる。表に斜体で示していない項目でも、頻度1または2で中学校教科書に出現する項目もあり、基礎的な表現に限られているようである。そのため、上位に位置する項目は、かつて Cummins (1979, 2008) が区別した Basic Interpersonal Communicative Skills (BICS)、基礎的対人コミュニケーション技能を支える表現知識となり、Cognitive Academic Language Proficiency (CALP)、認知学術的言語能力に関わる表現は限られていると言える。つまり、頻度が高いものは基本的な日常の対人コミュニケーション場面に関わる表現となり、学術的場面、高次の思考に関わる表現には接触する機会が少ないことが指摘できる。

下記、表4に極めて主観的な方法とはなるが、今回の高等学校教科書データから著者が確認し、話し言葉、書き言葉いずれがで学術場面などでも用いられる可能性がある定型表現を抜き出した結果を示す。また、その実態と有用性を検討するために、比較対象として、Simpson-Vlach and Ellis (2010) による学術定型表現リストの話し言葉・書き言葉の基本定型表現である Academic Formula List (AFL) の上位50項目を表5に示す。このリストは、単純頻度ではなく、FTW (formula teaching worth)、定型表現の教える価値順という独自の指標に基づいている。本稿では、紙幅の都合により、省略したが、Core Academic Formula List は、話し言葉 (speech)、書き言葉 (writing)、それぞれ200項目のリストが作成されており、そのどちらにも共通する項目が、Core Academic Formulas List, Written and Spoken の200項目である。

表4に抽出した、学術場面での使用が検討できる定型表現と、Core Academic Formula List を比較し、重複する項目を表4に斜体で示した。その結果は、it is important to, point of view, look at this, the other hand, as a result, take a look のわずか6項目であった。また、表4は主観的に選

表 4. 高等学校教科書データ中の学術場面での使用が検討できる定型表現

No.	N-grams	Freq.	Range	No.	N-grams	Freq.	Range
1	for example	13	2	26	best of	4	2
2	<i>it is important to</i>	10	1	27	i don't think	4	3
3	thanks to	9	3	28	most of	4	1
4	i think that	8	2	29	used to	4	1
5	so on	8	3	30	we found	4	2
6	depend on	7	1	31	a part of	3	1
7	one of the	7	2	32	afraid to	3	1
8	point of view	7	3	33	any questions	3	3
9	guess what	6	3	34	as soon as	3	2
10	let's see	6	3	35	examples of	3	2
11	<i>look at this</i>	6	3	36	facts about	3	1
12	one thing	6	2	37	i don't know why	3	1
13	percent of	6	2	38	i'm not sure about	3	2
14	some of	6	2	39	it means	3	2
15	because of	5	2	40	it showed	3	1
16	idea of	5	1	41	it's better to	3	1
17	i think so too	5	3	42	just a moment	3	2
18	kinds of	5	1	43	let me	3	2
19	looking at	5	1	44	let us	3	2
19	of course	5	2	45	relationships with	3	1
21	<i>the other hand</i>	5	3	46	shall i show	3	1
23	the way	5	3	47	<i>take a look</i>	3	2
23	a kind of	4	1	48	that means	3	1
24	a piece of	4	1	49	times of	3	1
25	<i>as a result</i>	4	2	50	when to	3	1

択した結果の表であるため、this is a, it is not など AFL に含まれているが、特に学術場面に限らないと判断したものは除外されている。さらに、今回の教科書分析の抽出基準は、頻度 3 以上としたため、それ未満での出現例はあるかもしれない。それらの限界点を踏まえても、この両者の比較は、説明文、書き言葉が多くなった高等学校教科書においても、学術場面で使用される定型表現を十分な頻度で提示することが困難であることを示している。したがって、学術場面など特定の場面における有用性が高い定型表現については、指導者がその指導時に払う注意や教室の活動が学習者に影響を与えることが予想できる。

表 5. 学術場面における話し言葉・書き言葉の基本定型表現 (Core Academic Formulas List, Written and Spoken) 上位 50 項目 (Simpson-Vlach & Ellis, 2010)

No.	Formula	WPM (speech)	WPM (written)	FTW	No.	Formula	WPM (speech)	WPM (written)	FTW
1	in terms of	337	282	3.53	26	at the same	109	117	1.19
2	at the same time	92	98	2.56	27	the point of view	17	15	1.13
3	from the point of view	11	14	2.44	28	in such a way	13	19	1.11
4	in order to	153	255	2.35	29	the use of	27	270	1.11
5	as well as	68	255	2.08	30	in other words the	22	18	1.08
6	part of the	201	216	1.96	31	in terms of the	56	67	1.07
7	the fact that	178	203	1.96	32	more likely to	42	76	1.06
8	in other words	146	89	1.90	33	likely to be	37	115	1.03
9	the point of view of	10	15	1.89	34	in this case	87	91	1.03
10	there is a	143	223	1.72	35	as opposed to	53	40	1.02
11	as a result of	26	75	1.58	36	the way in which	27	39	0.94
12	this is a	305	76	1.57	37	based on the	30	134	0.91
13	on the basis of	23	82	1.50	38	can be used	13	89	0.87
14	a number of	88	215	1.50	39	the relationship between	21	75	0.87
15	there is no	50	185	1.45	40	it is not	33	188	0.81
16	point of view	82	60	1.41	41	and so on	153	68	0.79
17	the number of	79	246	1.38	42	on the basis	24	94	0.75
18	the extent to which	10	52	1.36	43	the difference between	44	38	0.74
19	as a result	61	125	1.35	44	it may be	45	87	0.72
20	in the case of	32	135	1.32	45	the presence of	21	130	0.70
21	whether or not	59	81	1.31	46	in the sense that	34	22	0.70
22	the same time	96	104	1.26	47	a variety of	26	91	0.69
23	with respect to	44	104	1.26	48	different types of	24	28	0.69
24	point of view of	13	15	1.22	49	extent to which	10	54	0.66
25	as a function of	19	36	1.19	50	exactly the same	43	17	0.65

#### 4. 総合考察

ここまで、小学校、中学校、高等学校の英語教科書で用いられる定型表現の使用実態を検討してきた。本節では、その結果を総合的に考察し、検討を加えることとする。本稿冒頭で確認した Wray (2002) による定型表現の定義は、「ひとつのまとまりとして記憶に貯蔵され、言語使用の際に想起されるもの」(p. 8) とされているが、何をまとまりと感じられるかは、

表 6. 基礎口語定型表現上位 50 項目

順位	項目	標準頻度	順位	項目	標準頻度
1	you know	2890.76	26	oh my	790.80
2	I don't	2560.97	27	did you	761.28
3	are you	2068.99	28	I'm sorry	729.32
4	this is	1916.83	29	need to	729.13
5	have to	1826.69	30	you know what	707.32
6	do you	1608.86	31	I didn't	698.31
7	want to	1569.74	32	what are you	697.92
8	I know	1426.48	33	it's not	677.80
9	I have	1339.05	34	a lot	663.89
10	all right	1291.86	35	oh my god	659.37
11	no no	1259.90	36	talk about	647.56
12	I think	1222.67	37	I want	646.40
13	I'm gonna / going to	1147.56	38	for you	621.02
14	going to	1101.59	39	you think	607.67
15	I mean	1067.18	40	I thought	578.15
16	a little	1059.85	41	and then	565.74
17	come on	989.16	42	I love	529.08
18	if you	964.90	43	look at	520.68
19	thank you	955.31	44	we have	499.18
20	I can't	954.56	45	talk to	496.99
21	I got	914.89	46	one of	483.58
22	you wanna	907.89	47	I need	483.39
23	I don't know	853.78	48	let me	478.31
24	you guys	837.80	49	I had	472.49
25	I can	801.89	50	go to	471.61

当然、母語話者と第二言語話者の違い、言語話者個人による違いもある。また、Adolphs and Carter (2013) が指摘するように、「母語話者の直感でも即座には気づくことが難しく、概して潜在意識的に用いられる」(p. 27) 定型表現もある。同じ定型表現でも、出現する位置によって役割や意味が異なることもある。表 6 に示す American Sitcom Corpus で最も頻度の高い定型表現は、you know であるが、単独で用いられる間投詞的な you know (ねえ、あのさ) 以外にも下記 20 項目の定型表現族がある。これら 20 項目に目を向けると、会話の流れを示す役割 (例, you know what? but you know ...), 同意を得る機能 (例, you know what that (means), you

know what I mean?) など働きも多様であることが理解できる。定型表現のみを取り出しても、同じ形で用いられる定型性に加えて、異なる形に拡大する可変性があることが確認できる。

you know what, do you know, you know how, but you know, well you know, did you know, you know it, how do you know, do you know what, you know why, you know what I mean, because (cause) you know, you know who, let you know, you know maybe, you know what that, you know what it's, if you know, as you know, you know me,

上記、表6に示した50項目中、小学校から高等学校の教科書を合わせて頻度3以上で登場しない表現は、you wanna, you guys, oh my godのわずか3項目であった。gonna, wannaのような非公式短縮形は規範的な言語を扱う教科書では登場しないことは理解できる。また、you guysも同様に非公式な表現であり、oh my godも文化的、宗教的な理由からインプットとして提示されない理由も理解できるであろう。教科書での使用も確認でき、基礎口語定型表現の上位に位置する項目は、you knowの例のように拡張性、可変性を伴うものが多い。教科書において、その拡張性、可変性がどのように確保されているかを明らかにするには、本来は、慎重な検討を要する。本稿では、その一例として、小学校から高等学校教科書を通して、最も頻出であった2語のdo youを取り上げる。定型表現に加えて、文のレベルでの定型性と可変性を確認することとする。下記に、小学校から高等学校までdo youを用いた特徴的な表現を抽出した。小学校、中学校の例のカッコ内は、学年を示す。高等学校の例のカッコ内は、教科書名を表す(AA = All Aboard, PO = Power On, EL = Enrich Learning)。言語機能で分類を試みたが、実際は教科書の構成により、文が果たす機能が影響されるため、必ずしも教科書内での言語機能と一致しないことには注意が必要である。

### 小学校

● 話題の導入

*Do you know* this tower? (6), *Do you like* camping? (Picture Dictionary)

● 相手を知る

*How do you spell* your name?(5), *What sport do you like*?(5)

*Where do you live*?(6)

● 気持ち・考えを尋ねる

*Why do you like* winter?(5), *What club do you want to join*?(6)

### 中学校

● 話題の導入

*Do you remember* the trip to Kyoto?(2), *Do you know which* country has the largest population in the world?(3)

● 相手を知る

*Do you live* around here?(1), *What animal do you like*?(1), *How do you come to school*?(1), *What time do you get up*?(1)

● 気持ち・考えを尋ねる

*Do you have any good ideas*?(2), *What kind of movies do you like*?(2), *Why do you think so*?(2), *Which transportation do you want to take*?(2)

### 高等学校

● 話題の導入

*Do you use* plastic bags in your daily life?(AA), *Do you know anything about* banana paper?(AA), *How often do you take a train*?(AA), *Why do you think* school might start and end early?(PO), *Do you ever find yourself stuck for words*?(EL), *What do you know about* garbage in the oceans?(EL)

●気持ち・考えを尋ねる

*Do you agree with* Angie's advice? (EL), *Do you want to* watch e-sports? (PO), *Do you think* people's attitudes have changed? (EL), *Do you think you could* move to another country like Matt and Jennifer? (EL), *Do you think there is anything you could* learn from Nelson Mandela's life? (EL), *What do you think of* Kuniyoshi's pictures? (AA), *What else do you want to* find out about Hawaii? (EL), On the other hand, *how many* clothes *do you think* are thrown away every year? (EL), *How do you think* your lifestyle affects things happening in one second? (EL)

上記では、do youを含む定型表現と考えられる項目について、機能を分類して示した。また、定型表現として認識可能かを検討するため、do you + 動詞原形、what do you + 動詞原形、how do you + 動詞原形、what 名詞 do you + 動詞原形、what kind of 名詞 do you + 動詞原形、do you have any 名詞、do you think you could + 動詞原形、what do you think of 名詞、how do you think + 主語 + 動詞などを太字斜体で示した。機能の面では、どの学校段階でも、「話題を導入する」、「気持ち・考えを尋ねる」機能が確認できる。また、小学校、中学校では、目の前の相手とのコミュニケーションを取る場面が多いためか、「相手を知る」機能としての疑問文も確認できた。いずれの機能でも、do you + 動詞原形による一般疑問文では、動詞が多様化しており、疑問詞を含む疑問文においても文は多様化、複雑化している。

通常、do youは「二人称単数・複数的一般動詞現在形の一般疑問文」「疑問詞 + do youで一般動詞現在形の疑問詞を用いた疑問文」などの文法形式として知識を指導される。しかし、上記の例のように言語の機能、働きをともなった定型表現としての指導は、どの程度、検討可能であろうか。例えば、do you know ---、do you like ---は相手が知っていることや好きなことを聞いて、話題を導入する機能、do you agree with ---は、相手の同意・不同意を尋ねる表現、what do you think of ---は相手の意見を尋ねる表現な

ど、いくつかの表現は機能の細分化も可能である。これらを定型表現知識として認識、指導できれば、その定型性を拡張、共起する語を入れ替えることで受容・産出表現知識の向上を図ることが想定できる。また、教科書では、do you に続く副詞は、usually（6例）、ever（2例）、often（1例）のみであったが、do you *actually* need, do you *all* think, do you *always* have to, why do you *even*, do you *really* want to のように副詞を加えて可変した定型表現としての産出知識を持つことができれば、表現の幅はさらに広がる。

次に、教科書の定型表現に見る話し言葉の特徴、口語性の課題を検討する。教科書は、規範となる言語使用を前提としているためか、実際の言語運用で確認される、いくつかの口語的特徴に注意する必要がある。一つ目は、完全性の課題である。例えば、今回の高等学校のデータでは、take a look at ...はあっても take a look は単独で登場しない（中学校では2年生で take a look 単独の出現例がある）。同様に take care of ...は単独の take care の出現例は確認できない（中学校では1、2年生に take care 単独の出現例がある）。American Sitcom Corpus をもとに作成した基礎口語定型表現リスト（Basic Spoken Formula List）で最も上位に位置する、you know の単独出現例は、中学校1年生で1例（Small Talk のセクションでつなぎ言葉の1つとして紹介）、高等学校の教科書2種で4例である。高等学校教科書での出現例は、教科書本文では Power On の補足リーディング（Supplementary Reading）における編集されない教材の1例で、残り3例は、リスニングパートのスクリプトである（Power On 1例、Enrich Learning 2例）。Enrich Learning では、you know what?の例を2例、確認できた。日常会話における不完全な文の出現例に慣れる、また、会話を円滑に進めるために、文としては不完全であっても簡潔な表現を用いるためにも、教室内インタラクションにおいては口語的な表現を積極的に用いる価値はあると考える。

二つ目は、語彙の口語性の課題である。感謝の表現、thank you には共起する語彙による多様性、可変性が認められる。今回対象とした、教科書

データでは、thank you very much が中学校から高校まで合わせて7回、出現する。しかし、話し言葉での出現回数の多い、thank you so much の出現例は、中学校2年生、3年生でそれぞれ1回ずつの計2回である。Google社による書籍データの複数語句使用分布調査のためのサービス、Google Books Ngram Viewer を用いると、thank you very much が thank you so much と比較して2倍程度、多く用いられていることが確認できる(図1)。ただし、その差は年々、縮小していることも確認できる。現代アメリカ英語を代表する Corpus of Contemporary American English (COCA) では、thank you very much 22,591回、thank you so much が16,459回と、その差は縮まる。さらに日常の話し言葉を代表する American Sitcom Corpus では、thank you very much が<sup>3</sup>101回、thank you so much が351回と、その差は逆転する。また、very, soの形容詞との組み合わせについて、小学校から高校までを通して分析したところ、very+形容詞は、58回(例、good, kind, important, crowded等)であったのに対し、so+形容詞は29回(例、cute, fast, good, crowded等)で、その中にはveryで置き換えられないso+形容詞+thatの構造も含まれてい

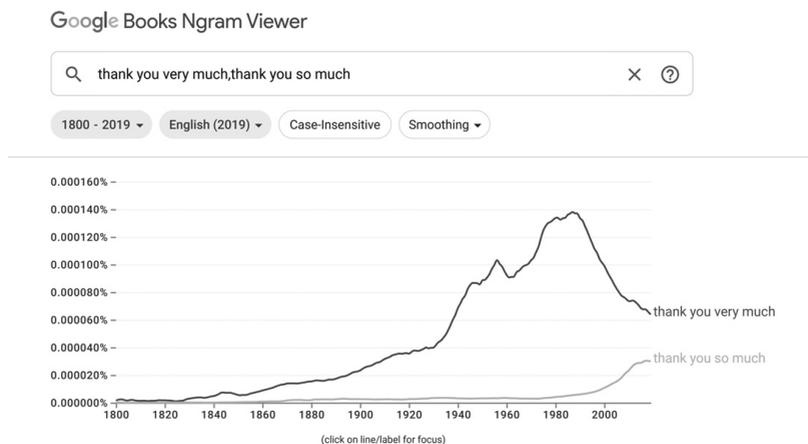


図1. Google Books Ngram Viewer における thank you very much, thank you so much の比較

た。形容詞との組み合わせでも very の使用は so と比較して 2 倍程度、多いことがうかがえる。very と so の例のように現代英語でも変化の見られる口語表現には、学習者が学校を離れて英語を使用することを踏まえた注意が必要である。一方、本研究の焦点である定型表現ではないが、口語性に関しては、教科書にも工夫が確認できた。例えば、Power On 英語コミュニケーション I では、「Zoom in with コーパス」のセクションで、話し言葉での助動詞では、would, could, might の使用が多いこと、また、話し言葉の関係代名詞では、which よりも柔らかい雰囲気 of that が好まれることなどを紹介するなどの使用言語の特徴による違いを説明する工夫が施されていた。改めて指摘するまでもないが、教材の作成、教室での指導にあたって、英語使用の通時的変遷を反映する視点も重要である。

話し言葉、口語性の観点から最後に、縮約形 (contraction) の課題を確認する。教科書は話し言葉と書き言葉の均衡を図りながら慎重に設計、執筆されている。縮約形についても、過去の教科書よりも多く導入、提示されている印象もあるが、定型表現の持つ「音のまとまり」としての観点及び縮約形の使用により、発話時の認知、動作の資源を節約する観点からも、ここでは、いくつかの表現を検討したい。小学校から高校までの教科書を通して、it is は 90 回、it's は 117 回、出現する。一方、American Sitcom Corpus では、it is は 319 回、it's は 33,539 回、出現する。教科書でも、it's が優勢であるが、話し言葉では 100 倍以上の差となる。また、教科書では、you are が 77 回、you're は 40 回、出現する。American Sitcom Corpus では、you are が 3,920 回、you're は 23,787 回と 4 倍程度、you're が多く用いられている。その他にも、I'll be が 4 回、出現するものの、その例は全て I'll be able to であることなど、縮約形の使用回数や多様性には課題がある。American Sitcom Corpus に見る、話し言葉では、I'll be fine. I'll be careful, I'll be right back. I'll be there. I'll be with you. など様々な定型表現を構成する要素であることが分かる。it is, it's の例では、書き言葉や話し言葉で場面によっては、縮約しない it is が好まれる例もある。その他の縮約形の例についても、スタイルの違いなどで同様に、縮約しない形式が望まし

い場合はある。しかし、その頻度の差に注目すると、学習者の口語定型表現知識の習得のためにも、教科書とともに、教室での場面に応じた縮約形および縮約形を用いた定型表現使用のインプットを用いることには一定の意義があると言える。

## 5. ま と め

本稿では、定型表現とその役割についてまとめ、小学校から高等学校までの教科書データを用いて教科書の定型表現、教科書を踏まえた教室内インプット、インタラクションの役割について考察した。また、頻出する定型表現と対人コミュニケーション場面との関連性から、主に話し言葉データとの比較を行った。本稿に示した結果は、そのような限界点を持つものとして、解釈に注意が必要である。実際には、学習目標となる言語使用(target language use)により、指導、学習の対象となる定型表現は、多様性を持つ。形式的で格式の高い定型表現使用が求められる場面も多く存在する。教室で学ぶ児童、生徒が将来、そのような場面で英語を使用する可能性もある。高校生が、日本の大学ではなく、海外の大学に直接、進学する例を聞く機会も多くなった。そのような環境では、日常のコミュニケーション場面からより格式の高い言語を用いる場面まで、その言語使用域(レジスター)は幅広く想定され、本稿で紹介した定型表現よりもさらに複雑な形式を使用する必要性が考えられる。ただし、複雑な形式の定型表現、可変した定型表現を用いる場合も、その基礎となるのは小学校から高等学校まで繰り返し使用される教科書と教室内インタラクションに頻出する定型表現である。本稿では、限られた教科書のインプットに加えて、教室内インタラクションが定型表現知識の定着に果す役割の重要性について確認した。分析したデータの規模や分析方法から、考察できた範囲は限定的であったが、本稿の要点を下記に示し、まとめとする。

### 本稿の要点

- 複数の語句でまとまった意味や機能を持つ定型表現は、言語使用に占める割合が高く、様々な有用性を持つ言語知識である。
- 定型表現は、文や談話を組み立てる構成要素（building blocks）として、言語産出時に学習者の認知資源の節約や流暢性の向上に役立つ。
- 教科書のインプットでは対人コミュニケーションを支える基礎的な定型表現が提供されているが、その知識の定着には、教室内インタラクションにおける繰り返しや知識の多様性につながる可変されたインプットが重要な役割を果たす。
- 話し言葉的表現、句動詞など、教科書でのインプットが不足している定型表現は、教室内インタラクションでの積極的な活用が望まれる。縮約形の使用、前置詞をとまなう表現など、特に音のまとりや音の変化（速度、弱化、同化、脱落）の理解が重要な定型表現の習得には教室内のインプットが有効に機能する可能性がある。
- 教科書では、学術的な場面での使用が想定される定型表現が十分な頻度で提示されていない可能性がある。そのため、場面によって有用性を持つ定型表現の指導には、指導者の配慮が重要である。
- 意識しないと見落とされる可能性の高い定型表現も学習者の知識に働きかける可能性があるため、指導者と生徒、生徒間の英語による教室内でのコミュニケーション、意味のやりとりが定型表現学習に果す役割の大きさに期待される。

### 引用文献

- Adolphs, S., & Carter, R. (2013). *Spoken Corpus Linguistics: From Monomodal to Multimodal*. Routledge.
- Cummins, J. (2008). BICS and CALP: Empirical and theoretical status of the distinction. In N. H. Hornberger, (Eds.), *Encyclopedia of Language and*

- Education*. Springer.  
[https://doi.org/10.1007/978-0-387-30424-3\\_36](https://doi.org/10.1007/978-0-387-30424-3_36)
- Erman, B., & Warren, B. (2000). The idiom principle and the open choice principle. *Text-Interdisciplinary Journal for the Study of Discourse*, 20(1), 29-62.
- Foster, P. (2001). Rules and routines: a consideration of their role in the task-based language production of native and non-native speakers. In M. Bygate, P. Skehan, & M. Swain (Eds.), *Researching Pedagogical Tasks: Second Language Learning, Teaching and Testing* (pp.75-93). Longman.
- Hsu, J. T., & Chiu, C. Y. (2008). Lexical collocations and their relation to speaking proficiency of college EFL learners in Taiwan. *The Asian EFL Journal*, 10(1), 181-204.
- Imao, Y. (2023). CasualConc (Version 3.4.0) [Computer software]. Retrieved from <https://sites.google.com/site/casualconc/>
- Keshavarz, M. H., & Salimi, H. (2007). Collocational competence and cloze test performance: a study of Iranian EFL learners. *International Journal of Applied Linguistics*, 17(1), 81-92.  
<https://doi.org/10.1111/j.1473-4192.2007.00134.x>
- Schmitt, N., & Schmitt, D. (2020). *Vocabulary in Language Teaching*. Cambridge University Press.
- Simpson-Vlach, R., & Ellis, N. C. (2010). An academic formulas list: New methods in phraseology research. *Applied Linguistics*, 31(4), 487-512.
- Wray, A. (2002). *Formulaic Language and the Lexicon*. Cambridge University Press.  
<https://doi.org/10.1017/cbo9780511519772>
- Wray, A. (2017). Formulaic sequences as a regulatory mechanism for cognitive perturbations during the achievement of social goals. *Topics in Cognitive Science*, 9(3), 569-587.  
<https://doi.org/10.1111/tops.12257>
- 中田達也. (2022). 「英語は決まり文句が8割—今日から役立つ『定型表現』学習法」講談社.
- 田中洋也. (2022). 「TVドラマ・コーパス情報に基づく英語基礎口語定型表現リストと教材の作成」『人文論集』72, 41-69. <http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/4484>

【調査資料】

- New Horizon Elementary English Course 5.（令和2年度版）東京書籍.  
New Horizon Elementary English Course 6.（令和2年度版）東京書籍.  
New Horizon Elementary English Course Picture Dictionary.（令和2年度版）  
東京書籍.  
New Horizon English Course 1.（令和3年度版）東京書籍.  
New Horizon English Course 2.（令和3年度版）東京書籍.  
New Horizon English Course 3.（令和3年度版）東京書籍.  
All Aboard English Communication I.（令和4年度版）東京書籍.  
Power On English Communication I.（令和4年度版）東京書籍.  
Enrich Learning English Communication I.（令和4年度版）東京書籍.

